

# アーカイブの掌中で

ドゥルス・グリーンバイン

森林駿介 冨塚祐 訳

1

ある日、アーカイブに潜り込む。同時代人が共有する領域では決して見つからないであろう何かをアーカイブのなかから探そうとする、この衝動はどこから来るのだろうか？まるで鍵が失われてしまったかのように、そこでしか見つけることのできない人生の鍵が。これまで誰もが見落としてきたドキュメント、知られざる手紙、忘れ去られた紙片、幸運な発見——これらは、手がかりを求めるものたちが目当てにしてきた証拠品だ。アーカイブを掘り起こす（ひっかきまわす、と言いかけたが）人びとは、探偵のように未解決事件の解決に関心を寄せている。彼らはどこを探すべきかを正確に知っており、そこに何かが見つかることを確信する専門家の勸でもってして、発見された物——隠された書簡、かつてそれほど徹底的には調査されてこなかった原稿——に近づいていく。研究者の内なるガイガー・カウンターのスイッチは常にオンで、放射線を発している箇所に事情通が出くわすと、すぐに音を立てる。それは、一行の文章かもしれないし、便箋の頭書き、裏紙に書かれたふとしたメモかもしれない。あるいは、作者の作品への展望を切り開く、ばらばらの紙片の一枚かもしれない。ここで語られているのは、作家の遺稿、最近で言う生前の遺稿のことだ。ファイリングされアーカイブされた書類、あるいは物品や写真といったように、重要人物とランク付けされた者たち、すなわち詩人、哲学者、科学者、現代史上の重要証人たちが遺したものである。

アーカイブの多くは地下に設置されており、それは地下壕やワインセラー、武器庫、様々な目的で地下に作られたあらゆる種類のシェルターと共通している。ドイツ語文学の最も有名な最終貯蔵施設、マールバッハ・ドイツ文学アーカイブも、所蔵品とともにその大部分が地下に、すなわち、「シラー高地」と意味深に名付けられた丘陵の深部、ネッカー溪谷を見下ろす高台、地理学者がいうところの攻撃斜面の下に沈められている。（ゲーテの表現に倣えば）母たちのもとへ、あるいは（シラー含むドイツ古典主義者たちの、古代ギリシア・ローマを範とする思想に基づけば）父たちのもとへ向かう際、地下の空間へと降りなければならぬのは偶然だろうか？ 詩人たちの遺したものが、彼らのオリジナルの手稿が深みから掘り起こされる、このことはごく自然なことであるように思われる。死者たちだけでなく、文化を代表する者たちの証言もまた、後世に残すために、古き伝統に従って埋葬されるのだ。

そしてある日、驚くべきことに、自らがアーカイブに収められてしまう。少なくとも私たちのうちの何人かはそうだ。そして、同時代人が共有する領域では決して見つからないであろう何かを探す後世の人々の手によって掘り起こされる。アーカイブとは、生者が死者に出会う場所なのだ。魔法のような場所であり、そこで熱中して資料を読む瞬

間、死者の側に身を移すことができる——私もまた、そんな経験をしたのだった。私はマールバッハで何度か朗読会に登壇し、新旧のテキストについて語り、ライナー・マリア・リルケと彼のロシア愛について、同テーマの展覧会で講演したこともあった。その時すでに、アーカイブは私をその深みに引きずり込んでいた。今でこそ一般的になってきたが、私は、生前の遺稿を買い取り、生きているうちに作家の資料を保存したいという申し出を受けていた。この申し出は断りがたく、また、後援者も見つかり、シュヴァーベン地方の事業家が共同で資金提供をしてくれることになった。それからの出来事は実に刺激的なものだった。アーカイブのスタッフたちがベルリンの私の自宅を訪れ、紙片や書類を箱に詰めたり、使える保存用の見本がないか私の蔵書をじろじろ眺めたり、まるでついでのように、彼らの欲望の対象である元気はつらつとした人間の生活環境を調べたりしていた。彼らは、私が再びマールバッハの中央壕を訪れたとき、私を喜ばせようと、頼んでもいないのにアーカイブにあるオリジナルを何点か差し出してきた。ただ見せるだけではあったのだが。「何をご覧になりますか？」当時、私はまだ死者の領域に足を踏み入れたばかりで、手当たり次第にいくつかの名前を口にしていた。パウル・ツェラン、ゴットフリート・ベン、エーリヒ・ケストナー、そんな名前が興奮のなか真っ先に思い浮かんだ。他の名前でも良かったのだが、宝物庫のなかで不意を突かれ、どの宝石に手を伸ばしていいか急いで決めなければならないときというのは、得てしてそういうものだ。そして、開けゴマ、とばかりに管理人のひとりが手稿部門から緑色の箱をいくつか持ってきて、壊れやすい貴重品に触れる際に誰もが着用しなければならない白い手袋をはめるよう促し、そのままオリジナルの原稿の数頁を私の前に並べてくれた。どこか卑猥な感じがして、とてもではないが、この状況を受け止めるだけの器が自分にあっただとは言い難い。これを目にするにはお前はあまりに若すぎる、と思ったし、その刺激的な資料を差し出されたとき、私はまったくもって心ここにあらずの状態だった。xxxxと大胆に削除した跡が刻まれたパウル・ツェランのタイプ原稿、ゴットフリート・ベンが持っていた医師・薬剤師協会のポケットカレンダー、エーリヒ・ケストナーがドレスデンの最愛の母に宛てた親密な手紙。目が釘付けになり、私は動揺していた。少なくとも、請求したアーカイブ資料を受け取る時のゲルマニストの気分ではなかった。ある種の恥の境界線が侵されたのだ。いったい私は何者なのだ、偶然の客であるというのに、それまで本を通じてしか知らなかった作家たちの最も個人的なものをいとも簡単に手渡されるとは？ 当時の私には、担当の管理人が明らかに節度を超えているように思えた。しかし、私の知人であり、今では私自身の書類の管理人でもある彼は、まったく見解を異にしていた。私の羞恥心は彼にとってむしろ奇妙に映ったようで、それどころか彼は、私に自由に箱をあさるように勧め、手稿を託して私をひとり残して立ち去ったのだ。もし私がそれらをしまい込み、汚し、傷つけてしまったら、どうするつもりだったのか？ あるいは、感極まって貴重なオリジナルに感動の涙をこぼしてしまったとしたら？ アーキビストとは、ふたつの世界を媒介する目立たない使者のようなものだとその時私は思った。事実そうだった。私がそれ以上なかを見ずに雑記帳のひとつを閉じると、突然彼は再び私の前に立ち、無言で私をアーカイブの別の棟へと案内した。ここでは、作家たちの蔵書がアルファベット順に並べられていた。忘れられないことがひ

とつある——「B」の文字に続いて予想通り「C」の文字が並んでいたのだが、それだけではなく、そこにある本たちは、その著名な使用者たちについて、死後に彼らが望んだ以上のことを明らかにしていたのだ。ゴットフリート・ベンの場合、その蔵書は例外なくドイツ語のタイトルで占められていた（それらの本が彼の作品に与えた影響については現在よく研究されているが、それは彼自身が出典の明示を惜しまなかったからでもある）。それに対して、すぐ隣のパウル・ツェランの本が収められた棚には、様々な言語の書籍がずらりと並んでいた。ロシア語（エセーニン、ブロック、マンデリシュターム、パステルナーク）、フランス語（ランボー、アポリネール、ヴァレリー）、イタリア語（ウンガレッティ）、英語（シェイクスピア、エミリー・ディキンソン）、ルーマニア語、スペイン語の詩集、さらにいくつかのヘブライ語の詩集。これらはすべて、ツェラン自身が翻訳の仕事場で手がけた作家たちの作品だ。なぜこのことに言及するのか？それは、いやになるほどに違いが明白で、考えさせられるものだったからだ。かたや、医師として実務をこなしていた（そして従軍経験をもつ）ベンは、同じ出自、同じ世代のどこにでもいるドイツ人と同様に、ひとつの言語に囚われていた。かたや、ブコヴィナの多民族都市チェルノヴィツ出身で、ホロコストを生き延びたユダヤ人であるツェランは、母乳とともに多くの言語を吸収していた。ツェランの全作品はそれに応じて多面的で、ヨーロッパの様々な言語のなかできらめき、外来語が入り込んでいるという点では他の追随を許さなかった。とはいえ両者とも、それぞれのやり方で、二度と戻らぬ近代という時代を体現していた。私としては、フランツ・カフカなど、「K」の見出しの蔵書も探して回りがかったが、そうしても何にもならなかっただろう。カフカの個人蔵書はよりもよってヴッパータールにあるからだ。研究機関が1980年代にミュンヘンの古書店から買い取ったのだ。『審判』や「父への手紙」の手稿が入った緑色の箱に近づく勇氣はなかっただろう——また、そのような宝箱をあさりと開けてもらえるとも思えない。

私が少し勇氣を持てるようになったのは、その後、再びマールバッハを訪れたときのことだ。その頃、私はとある調べものに本格的に乗り出していた。私の生まれ故郷、ドレスデン近郊の田園都市ヘレラウについての記憶を本にまとめるための調査の一環として、私は初めて資料の希望リストを携えてそこに向かったのだ。なかでも私が求めたのは、ヤーコブ・ヘグナーの遺稿だった。「ヘレラウ印刷所」の創始者であり、シュテファン・ツヴァイクの学友でもあった人物だ。ヘグナーの出版社は、私自身もそこで育ったのだが、両大戦間にヨーロッパの最も興味深い作家たちの作品を世に出している。それらはほとんどが手作業で組版された貴重な版で、その品質は現代の作家たちからすれば夢のようなものだった。

紙の森にて、ひとり歩きぬ。何ひとつ求むる、こころあらずして。すると私はフリードリヒ・シュナックなる作家の手紙に出会った。それはまったく別の話だった。この作家は表現主義の自然詩人であり、1933年に先んじた人物、すなわち、アドルフ・ヒトラー新首相に対する「最大の忠誠」を誓った誓約書に署名した作家たちのひとりだった（後に少なくとも一部の者たちはそれを後悔した）。一方では第三帝国の流れに迎合した

人物であり、他方では郷土文学スタイルの無害な語り手として、『人生の三時期』という一見して無時代的なタイトルの小説三部作（ノルヴェーの小説家クヌート・ハムスンを手本としており、彼の小説はこの三部作全体に深く影響を与えた）の作者であった。そして、戦後は造園をテーマにした実用書に鞍替えし（ナチス時代、ヘレラウにいた頃にすでに蝶や、森や野に生える薬草について取り組んでいた）、その後ウォルト・ディズニーによるドキュメンタリー映画『草原の奇跡』[邦題『滅びゆく大草原』]のドイツ語版書籍の共同執筆者も務めた。典型的なドイツ人作家のキャリアだ。別の言い方をすれば、彼は、ヒトラーの国に残り続けた者たち、帝国文学の厳格な基準のもとで出版を続けた者たちが後に「内なる亡命」と呼んだものを体現する典型例だった。そんな男が私に何の関係があったというのか？ 私の興味を引いたのは単に、彼があ頃のヘレラウで文化的生活を営んでいた人間のひとりだったからだ。すなわち、ヘレラウがある種のユートピアだった時代、ドイツのすべてのユートピアを破壊しつくしたふたつの大戦が起こる前とその間の時代のことである。このエピソードを持ち出したのは、研究者がアーカイブでどんなことに出くわす可能性があるかを示すほんの一例としてである。冗談などではなく、このフリードリヒ・シュナックなる人物を私をはじめ知ったのは、マールバッハにおいてだった。

## 2

本は、灰と化した我々を納める潜在的な骨壺である。かつてヨシフ・ブロッキーはどのように書いたことがあったが、それはここですでに証明されたことだ。さらに、「良い」と「悪い」ものを区別するためには大量の駄作を読まなければならない、ということについても同様だ。うえて挙げた作家について何か言いたいわけではない。彼はひとつの例に過ぎないし、過去の（そして忘れ去られた）作家たちを裁こうなどというつもりもない。私自身、次々と新しい名前や話題の本が叫ばれては消えていく、ドイツ文学のなかの一過性の現象に過ぎないのだから。

何が残り、何が存続するか最後の審判を下すことなど、同時代に生きる私たち、絶え間ない新刊出版の渦に巻き込まれ、書籍市場の奴隷と化した私たちには、まるで想像の及ばぬことだ。文学研究がますます拡大し、研究の対象がことさらに多様化している今日においてはなおさらである。グローバル化の流れのなかで、植民地化のあらゆる波が歴史的に捉え返される循環のなかで、重要とされるものの領域は大きく広がってきた。長きにわたって大学では、国家的伝統の枠を越えた視野を持つことが義務づけられてきたし、それは正当なことだ。すでに芸術におけるモデルネは、あらゆる大陸への想像力の探検でもって、文化純粋主義者が認めることができた以上のものが、個々の作品、絵画、小説、詩に影響を与えたことを私たちに教えてくれている。ファシズム、ドイツの国民社会主義は、芸術における純粋主義の最後の稜堡であり、あらゆる異質なものを、あらゆる奇異な美学を「退廃的なもの」として誹謗した。幸いにもいまではその稜堡は崩れ、あらゆるものが混ざり合うことができるようになり、どんな混合でも花を咲かせることができるようになっていく。それは文学も同様である。古典主義者であれ、反古典主義者であれ、グラフィック小説に傾倒する若い作家であれ、古い形式を模倣する詩人で

あれ、これまでにない形式を提示する詩人であれ、シンガーソングライターであれ、作詩・作曲家であれ、散文やこれまでにないジャンルのポップアーティストであれ、ただちに学術的探究や最新のカリキュラムの対象になりえないものなど存在しない。水路は完全に開かれ、大学には、あらゆる流行やシーズンごとのトレンドを迎え撃つ準備ができています。ここまではよかったのだが、そこで私はフリードリヒ・シュナックのような人物に出会ったのだ。私がここで言いたいのは、つまり、私は単に手稿に出会ったというだけでなく、灰をかき回しもした、ということだ。ドレスデン、ベルリン、プリンストン、パリ、ロサンゼルスのアークイブやさまざまな図書館で過ごした多くの時間のなかで、再三私の目をひいたのは、あの場所で本にかぶさるように座っている読者たちが幾度となくくしゃみをしていたことだった。ハクション！ ヴァルター・ベンヤミンも、『パサージュ論』を執筆するためにパリの国立図書館で何時間も過ごすなかで、くしゃみを何度かしていたのだろうか？

本の虫がたてる音は、今でも私につきまとっている。

### 3

アーカイブの意味について語ることは許されるだろうか？あるいは、フリードリヒ・ニーチェの言葉を借りて言うのなら、「生に対するアーカイブの利害について」語ることは？問題は「何を保存すべきか」ではない。問題は、「アーカイブは自らをどのように定義し、何を望み、あらゆる世代の生者のために何を保管すべきなのか」である。

ここで意見は分かれる。それは、(それぞれの国民文学の) 伝承されるべき正典をめぐる論争においてだけでなく、最近ではいわば日々の政治においてもそうだ。問題は次のようなものだ。社会は、民主的に組織されているにせよ、そうでないにせよ、これから何を保存するに値すると考えるようになるのだろうか？何に対して必要な資金を投じるのか、必要なあらゆる財政手段を講じて何を国家の宝として残すのか？問題は「永遠主義」(ヴァルター・ベンヤミンが「歴史の概念について」の数年前に書評で何気なく使った言葉であり、同論のテーゼは歴史の意味としての時間性を問題化する際の基準を打ち立てている)なのか、それとも暫定的なものなのか、つまり一時的にストックし、崩壊に脅かされる紙を保護することなのか？各アーカイブがそれぞれの基準に従って保証する「未来の世界観察」とは一体何か？とりわけここ日本において、私は疑問符について釈明しなければならない。危機の時代や一般的な混乱の時代に限らず、疑問符というのはあまりにも安易な補助手段だ。とはいえ、私自身は混乱しているわけではない、本当だ。単に、アーカイブのような国家の振興を受けた機関が実際のところ何を問題としているのか、疑問に思っているだけだ。誰が機関に委託しているのか？その機関は長期的に何を保存したいのか、あるいは何を保存すべきなのか？

理想を言えば、アーカイブは、絶えずかき乱される文化全体のなかにある牧歌的な場所である。一時的に確保された安寧の場所であり、秩序に関して言えば、単純明快さを備えた場所でもある。干し草の山から針を見つけた瞬間のことを誰もが報告することができる。体制の崩壊を乗り越えた信頼性の証であり、国家が滅亡しても(ドキュメント、まさに作家の遺稿が破棄されているのにもかかわらず)、なおも機能しているかのよう

な秩序の感覚の証である。しかし、とりわけ20世紀は違った経験を提示している。そこではアーカイブは、私たちが期待するものとは程遠く、きわめて信頼性に欠け、あちこち穴だらけである。少なくとも東欧においては、そこで起きたすべての出来事の後では、どれほど建築的に立派な建物に収められていたとしても、アーカイブは外も内もスイスチーズのようなものだ。穴だらけであること、つまり歴史的な体制に起因する欠落を抱えていることがその本質なのだ。そこから文書が見つかり、そしてなおも写真や証言がそこに存在するということには、ただ驚くばかりである。ほんの一例を挙げよう。旧ソ連の勢力圏で自由化が続く限り、すべては順調だった。体制間の対立が再び広まって以来（プーチン・ロシアの西側に対する戦争）、もはや何も保証されえない。スターリン体制下で迫害された人々の記録文書、失われたテキストや伝記を洗い直すことなど、なおさらである。唯一驚くべきは、壁崩壊後にモレクの干渉から逃れることができた東側諸国のなかに、啓蒙のようなものが存在していたことだ。最近の全体主義国家において退行、逆行、組織の空洞化、それどころか国家主導の記憶の封鎖が進展して以来（中国、トルコ、最近で言えば戦時下のプーチン・ロシア、あるいはスターリン専制政治の、特にグラーグ制の再調査に取り組んできた人権団体「メモリアル」の事例）、緊急事態が叫ばれている。アーカイブが燃えている！ この警句を、時代を超えた所見として発したのは、フランスの哲学者／美術史家ジョルジュ・ディディ＝ユベルマンだった。緊急通報！ 「アーカイブが燃えている」。

そこにはこう書かれている。「アーカイブの本質は、その隙間、穴の開いた存在であることにある」。補足すれば、穴が開いているというのは、事件の目撃者（無名の人々、一般市民だけでなく、著名な作家や政治活動家も）が、銃殺されたり、ガス室で殺されたり、拷問や過酷な労働、冬の寒さによって命を落としたから、というだけではない。彼らが肉体的に処分されるときには、しばしば、彼らに関する書類やその他の個人的な文書も消し去られていった。無名の生命の抹殺と個人の証言の抹消が織りなす迫奏がとりわけ卑劣な音色を奏でているのは、いわゆる「アウシュヴィッツの巻物」においてである。アウシュヴィッツのガス室や焼却場での殲滅に協力を強制させられ、最後には自らが殺された、かのゾンダーコマンドのユダヤ囚人たちの秘密文書だ。彼らの巻物、(エジプト時代以降の) 正真正銘のパピルスは、ヘブライ語聖書の『エレミヤの哀歌』に匹敵するものだが、ビルケナウの焼却場の裏手の土中に埋められ、保存されているのはほんの一部に過ぎない。残りはおそらく、ユダヤ人の財産、装飾品、貨幣、宝石をねらう財宝発掘者によって、後に価値のないものとして破棄されたのだろう。

#### 4

つまり、アーカイブは、長い時間の経過のために（ゲーテの『ファウスト』の言葉を借りれば、あらゆる理論と同じように）しばしば灰色、「周囲にある焦げたものの灰が浸透している」だけではない。それは、アルレット・ファルジュが自身のアーカイブの現象学で説明しているように、「絶え間ない不在」によっても特徴づけられる。まばらに残された資料は、人類史において暴力的体制が有した不朽の野蛮さに光を当てている。アーカイブが不完全であることが、組織的な隠滅の狂乱を想像させるのだ。「野蛮は文

化の概念そのもののなかにある」とヴァルター・ベンヤミンは『パサーージュ論』のなかで記している。それ自体が追放を受けた作者の絶望の死によって未完の作として残されざるをえなかったこの作品は、その中断された形態と穴だらけの組成において、乱石積・網目積、すなわち、モルタルで接着された割石から成る古代ローマの石積み比せられる。アーカイブとはそんなものであり、そうでしかありえない。せいぜいのところ綿密な調査において発掘と解明に努めるひとつの考古学であり、それは、アーカイブの「困難な物質性」(ファルジュ)に制約された再構築とならざるをえない。欠落に対する感覚のなかで深く隠されたものを発見することが、アーカイブの本来の仕事なのだ。だがそれはつまり、私たちはみな、伝承されたものの瓦礫、まばらな残骸のなかをさまように過ぎないということだ。頼りになるのは、たかだか全体の連関についてのおぼろげな予感だけであり、その連関はいつだってほのめかし程度にしか理解しえず、完全な知に至ることはない。

それにしても、一体何が記録されたのだろうか？ 保存されているもののうち、何が証言になり得るのだろうか？ こうした疑問からさらに根本的な問いが生まれる。すなわち、アーカイブの破局、あるいはアーカイブが証言者として示す破局、アーカイブがつねに部分的にしか描くことができない破局についての問いである。私たちが知っているのは、古代ギリシアの黎明期以来、アーカイブが繰り返し失われてきたということだけだ。たとえば、ペルシャのアテネ侵攻ではポリスの中央図書館が失われ、古代地中海世界の知を集積したと同時代人が評価したアレクサンドリアの図書館は大火で焼失した。つまりこれは、焦土作戦が続く状況下での記憶の信頼性をめぐる問いである。

広大な議論であることは認める。だが、ここでゲーテが助けになる。ゲーテはその生涯の終わりに、人間のあらゆる生についての展望を切り開いた。「不満の書」(『西東詩集』)のなかで、彼は雄弁かつ壮大に物語っている。「三千年の歴史について／自らに積明をなしえない者は／無知なるままに闇のなかにとどまるがよい／その日その日を生きるとも」。私はこの文をこれまで引用したことがない(引用もまた使い古されていく)。しかし、長らく先延ばしにされてきたこの一文は、箴言とみなすことができる。つまり、時代の破壊の嵐のなかで、支えもないまま一日一日を生きるということ、そんな生き方に私は早くから戦慄を覚えていた。いや、そんなふうには生きたくはなかったし、多くの人にとってもそうだろうと今でも思う。誰がそんなことを望むだろうか？

私自身のことから出発したが、ここでは私はほんの周縁に過ぎない。私は物を書き、折に触れて研究のためにわずかな時間を使ってアーカイブを利用しているひとりに過ぎない(それもめったにないことだが)。アーカイブの概念をあらゆる想像を超えるものとして捉えているひとりだ。画像までもが、探していたものであれ、探していなかったものであれ、あるいはこちらに舞い込んできたものであれ、その一部であり、写真、絵葉書、新聞の切り抜き、蚤の市のガラクラ、古書店の至宝、あらゆる種類の資料が、書かれたものにせよ図画的なものにせよ、そこに含まれる。ものひろいに夢中で、早くから閲覧室で夢を見るようになったひとり。貸出期限を平気で過ぎてしまい、図書館の利用カードを更新することはほとんどなかったひとり。ヨーロッパ中を飛び回り、会議場

や演台をうろつき、単なるいちカーソルとして切り替わる画面上を彷徨っているうちに、いつしか少なくとも数十冊の本のタイトルに名前がのるようになったひとり。そしてある日、自らがアーカイブに収められていることを発見したのだ、研究対象として。

[次に続いていく]

ドゥルス・グリーンバイン

[訳者付記]

本稿は、2023年12月3日（日）に開催された国際編集文献学研究センター主催イベント「生前の遺稿」(Nachlass zu Lebzeiten)における、詩人ドゥルス・グリーンバイン氏の特別講演の原稿とその日本語訳である。本講演は、自らの資料をアーカイブに預けた経験、アーカイブの意義や本質をめぐる思索、そしてその思索が現在進行形のものであることを詩人本人に語っていただいた、大変貴重なものである。なお、講演に際して、グリーンバイン氏には自身の詩„Hinter den Märkten des Trajan“（「トラヤヌス帝市場の裏にて」）を朗読していただいた。本作品の日本語訳は、当日通訳を務めてくださった縄田雄二先生編訳の『詩と記憶——ドゥルス・グリーンバイン詩文集』（磯崎康太郎、安川晴基訳、思潮社、2016年）に収められている（108-109頁）。

日本語訳は、イベント当日に字幕として作成、表示し、その後今回の掲載に際し加筆修正したものである。掲載を快諾していただいたグリーンバイン氏、訳出に際してご助言いただいた縄田先生、北島玲子先生、また、イベント当日に字幕の誤りをご指摘いただいた参加者の方々に深謝申し上げます。